

山の兔～酒井明 説話集21※～

山の兔はわりことしです。色んな物をかじります。
それでもなかなかの愛嬌者です。

梅雨の合間のきつい日が照りつける日のことでした。じいっと覗くと、おるおる。丸い目をしてじいっとしている。

やっと自分で食べれる様になった位の兔の子です。夕べ親と一緒に出てきて笹の葉なんかかじったが、帰りは取り残されて一人ぼっちになったに違いない。このままおいたら蛇か鳥の餌にされてしまうだろう。

あれこれやったが食べようとしない。牛乳を口に入れると飲み込んだので小さな入れ物でやってみた。顔をいっぱい突っ込んでおいしそうに飲んでくれる。

その内だんだん色んな物を食べてくれ、子どもたちに抱かれて遊ぶ様になりました。20日程の内に目方も倍以上増えてきました。

山の兔と飼い兔ではどんな所が違うだろう。

「この兔の顔の真ん中見たらちょっとじゃけんど生えちよるが、飼い兔にはこんな所はないじゃろう」

そう言われるとなる程うなずけますが、灰色がかった茶色の中に、一かたまりの白い毛はその気で見れば目立ちます。

太るに連れてそれも段々目立たなくなる様ですが、その山兔、昔の人は言いました。

「どんな丈夫な小屋に入れても、大きくなると十五夜の晩のお月様から迎えが来て必ず連れて帰られる」

それでかどうか判りませんが、子兔もおらなくなってしまうました。

両手で頬を撫でながら丸い目をして膝の上まで上がってくる。

そんなに人には慣れていても、色々な食べ物の味も知り、体もずいぶん大きくなっていましたので、大丈夫心配はいらんじゃろう、としばらくは家族の間で話の種になりました。

※) 平成26年3月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。

